

2017/09/03 のメッセージより 「不安とは何？」～不安の正しい解決～

人はわけも分からず「不安」になる。一生懸命生きているのに、一生懸命頑張っているのに、「不安」は消えない。何をしようとも「不安」がつきまとってくる。一体、「不安」の正体は何なのだろうか。私たちはなぜ「不安」になるのだろうか。どうすれば「不安」を解決できるのだろうか。今回は、「不安」について考えてみたい。最初に、「不安」が生じる仕組みから見てみよう。尚、御言葉の引用は記載のない限り新改訳聖書第三版を使用する。

- 「不安」の仕組み

人は神の中で生き、神の中で存在する者として造られた。

「私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです。」（使徒 17:28）

譬えて言うなら、人はキリストの部分であって、一人一人はその器官として造られた。

「あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。」（I コリント 12:27）

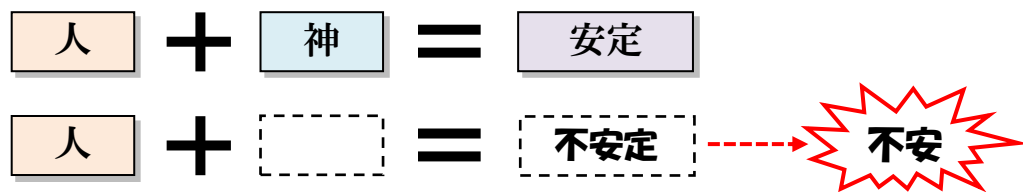
つまり、人は単独では生きられない造りになっている。まさしく単独では生きられないことが人の「弱さ」であり、その「弱さ」ゆえに、人は神と共に生きられる。このことから、人に於ける「死」が見えてくる。それは、神との結びつきを失うことだと。アダムが造られたときは、無論、人は「死」と無縁であった。ところがある時、悪魔の仕業でアダムは罪を犯してしまい、そのせいで人に「死」が入り込んでしまった。人は神との結びつきを失ったのである。

「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。」（ローマ 5:12 新共同訳）

人は神との結びつきを失ったことで、生きられなくなった。すべての人が生きられない姿となって生まれてくることになった。つまり、単独では生きられない「弱さ」が表に現れたのである。それは朽ちる体となった姿であり、神の愛が見えなくなった姿であった。人は、その姿に「不安」を覚える。以前、「弱さ」について詳しく述べたが、「不安」とは、神なしでは生きられないという「弱さ」に対する人の思いにほかならない。

このように、人は神との一体性の中で生きるよう造られたので、神と結びついているときは「安定」した状態でいられたが、神との結びつきを失ったことで、途端に朽ち果てていく「不

安定」な状態になってしまった。「弱さ」が主役になった。この「不安定」になった状態を、人は「不安」として認識するのである。



今日、人は様々な場面で「不安」を感じるが、どの「不安」も、人が神との結びつきを失った出来事につながっている。次に、そのことを見てみよう。

● 「不安」の認識

アダム以来、人は神との結びつきを失ってしまった。そのことで、神なしでは生きられない人の「弱さ」が表舞台に現れ、それが主役になった。それは「永遠」ではなく「有限」となった姿であり、神の愛が見えない、神とは「疎外」された姿であった。そして、「有限」となった体には様々な制約が起き、神と「疎外」された心にも様々な制約が起きた。まさに「安定」から一転して、様々な制約を感じる「不安定」な状態となった。この「不安定」な状態を人は「不安」として認識する。その「不安定」な状態には三つの側面があるので、人が覚える「不安」も三つに分類される。

第一に、「有限」となったことで「肉体の死」を知るようになった。必ず「肉体の死」が訪れることが分かった。人はそれを恐れ、「不安」を感じるのである。かといって、「肉体の死」は排除できない。それでも人は排除しようと試みる。そのことが「霊魂の不滅」を証明しようとする試みになった。「霊魂の不滅」を信じることで「不安」を解決しようと企てたのである。その企ては、アジアでは「輪廻転生」となり、古代ギリシャでは「肉体の死」によって魂は解放されて自由になれるという思想を生んだ。

第二に、「肉体の死」のせいで、何もかもが消えてなくなるという「無」を知るようになった。必ず「肉体の死」が、人が苦勞して得たものを奪い去ってしまうことが分かった。人はそれを恐れ、「不安」を感じるのである。つまり、「肉体の死」は、人がこの世界に幸せな居場所や、幸せにしてくれる富を築くことを決して許さない。そのことゆえに、人は何をしようとも、何を手に入れようとも「不安」を覚えてしまう。全ては消えて無意味となるので、人は「空しさ」を感じる。そのことを聖書は、「空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。日の下で、どんなに苦勞しても、それが人に何の益になろう」（伝道者 1:2-3）と綴っている。

第三に、神と「疎外」されたことで人は罪を犯すようになり、「罪責」を知るようになった。人は自らが犯す罪の罰を恐れ、「不安」を感じるのである。詳しく言うと、人は神と「疎外」

された状態になったことで御心が行えなくなってしまい、「私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています」（ローマ7:19）、罪を犯すようになった。だとしても、人は神の器官として造られたので、心には「神の律法」が書き込まれている。「彼らはこのようにして、律法の命じる行いが彼らの心に書かれていることを示しています」（ローマ2:15）。それが審判者となり、御心が行えない私たちの罪を容赦なく責め立ててくる。そのことゆえに、「罪責」が表舞台に現れ、人は神の裁きを恐れ「不安」になる。災いを罪の罰として恐れ、「不安」になる。そうした「不安」を、聖書はこう綴っている。

「というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。」（ローマ1:18）

このように、アダムが神との結びつきを失って以来、単独では生きられない人の「弱さ」が表舞台に現れた。それは「有限」となった姿であり、神と「疎外」された姿であった。そのことで、人は「肉体の死」、「無」、「罪責」を知るようになり、それを「不安」として認識する。



無論、これは根っこの部分の「不安」であって、人が普段覚える「不安」は、そこから派生した事柄になる。例えば、ある人は仕事に「不安」を覚える。ある人は老後に対し、ある人は人間関係に対し、ある人は自分の体に対し、ある人は自分の財産に対し、ある人は自分の家族に対して「不安」を覚える。こうした「不安」は、「肉体の死」、「無」、「罪責」による「不安」が根っこにある。

そして、以外に思うかもしれないが、「不安」の根っこの中でも「罪責」が最も強い。罪の罰を恐れる「不安」が最も強い。だから人は、自分の罪が暴かれないかと人の目を恐れる。周りから良く思われようと「この世の心づかい」（マタイ13:22）に邁進し、罪が暴かれて責めを受けまいと頑張る。自分を良く見せることで、必死になって罪を隠そうとする。罪が暴かれるぐらいならと、「肉体の死」さえもいとわない。まさに、神との「疎外」がもたらした「罪責」こそ、「不安」の頂点に君臨している。

ならば、神との結びつきを失って「不安定」な状態になり、そのことに「不安」を覚えるようになったのなら、人はどうするだろう。物質は「不安定」な状態になると「安定」を目指す。人も同様に、「不安定」になれば「安定」を目指すようになる。「不安」を何としても排除し、「安心」を得ようとする。それは、次のようにして行われる。

● 「不安」を「恐怖」にする

人は神との結びつきを失ったことで知るようになった「肉体の死」、「無」、「罪責」、これらを「不安」として認識する。そのせいで、様々な場面で「不安」を覚えるようになった。しかし、こうした「不安」の根っこは将来の出来事であって、目の前にある現実ではない。「肉体の死」も「無」も先の話であり、「罪責」も、神に裁かれたわけではない。神の前に立たされ、神の審判を実際に受けたわけではない。どれも、実現していない将来のことであって、現実となった実体があるわけではない。そうであっても、人はそうした「不安」を排除しようとする。

とはいえ、実体のない相手とは戦うことなどできない。そこで、人は「不安」を実体あるものにしようとする。困難な出来事に遭遇すると、そこに将来の「不安」を重ね、「不安」を見える対象にする。そうなると、実体のなかった「不安」は姿を持った形となり、現実の脅威となって迫ってくる。この脅威に対する思いを「恐怖」という。「恐怖」とは、まさしく「不安」が特定の対象となったときに生じる思いであり、「不安」の代理人である。つまり、人は自分の「不安」を困難な出来事に重ね、それを「恐怖」に変え、「恐怖」と戦うことで「不安」を排除しようとするのである。



例えば、人は「肉体の死」に対する「不安」を、「肉体の死」につながる困難な出来事に重ねる。重い病気や重い事故、衰えていく姿、さらには財政的な困窮も「肉体の死」につながるので、そうした事柄に「不安」を重ね、「恐怖」を覚える。だから、人は必死になって病気を治そうとする。ケガを治療し、衰えていく姿を食い止めようとする。さらにはお金を稼ごうとする。そうやって「恐怖」を打ち負かし、まだ見ない「肉体の死」に対する「不安」を排除しようとする。

例えば、人は「無」に対する「不安」を、「無」につながる様々な困難な出来事に重ねる。天変地異という困難な出来事は、富や命を奪い「無」に導く力を秘めているので、それに「不安」を重ね、「恐怖」を覚える。だから、万全の備えをして戦う。また、手に入れた富が人に奪われても「無」につながるので、富を奪う困難な相手に「不安」を重ね、「恐怖」を覚える。これが人との争いを生み、最悪、戦争まで引き起こさせる。

例えば、人は「罪責」に対する「不安」を、道徳という困難な行いに重ねる。そのため、道徳的な行いは「恐怖」となり、道徳的な行いを追求することで「恐怖」に打ち勝とうとする。良い行いに励むことで裁かれない人間となり、罰に対する「不安」を排除しようとする。それはつまり、人から良く思われる自分を目指すということの意味する。

このように、人は見えない「不安」を排除しようと、「不安」を見える困難な出来事に重ね、それを「恐怖」にして戦う。次から次に見える困難を「恐怖」にして戦う。そのことで「不安」を排除しようとするので、人は絶えず「不安」を「恐怖」にする機会をうかがっている。人の心は、紛れもなく「恐怖」を生産する工場になっている。

その工場では、特に人との交わりに対して最も多くの「恐怖」が生産されている。先に、頂点に君臨する「不安」は「罪責」であることを述べたが、「罪責」を知る具体的な罪は、人との交わりの中で生まれるので、人との交わりに「不安」を重ねて「恐怖」にしてしまうのである。これが最も頻繁に起きる「恐怖」であり、日々人が戦っている「恐怖」になる。そこで、その様子を具体的に見ておくことにしよう。

- 人との交わりを「恐怖」に

人が覚える困難な出来事は、人との交わりに集中している。なぜなら、人は人との交わりに対し、条件を突きつけてくるからだ。要は、「ねばならない」という「律法」を押しつけてくる。それができないと愛さない。

そうした「律法」は、人の「限界」から生まれた。人が神との結びつきを失ったことで様々な「限界」を覚えるようになり、その「限界」が人の「律法」となった。例えば、「有限」となったことで死という「限界」を覚え、そのことで頑張らなければならないという「律法」が生まれた。例えば、神と「疎外」されたことで愛されることの「限界」を覚え、そのことで愛される者にならなければならないという「律法」が生まれた。このように「限界」が様々な「律法」を生み、それが道徳的な行いの基準となり罪を意識させた。

ゆえに、罪を意識する「罪責」の「不安」を排除するには「律法」をクリアーするしかない。そうした事情から、親は子どもに対し、「何々をしなさい」という「律法」を突きつける。夫は妻に「律法」を突きつけ、妻も夫に「律法」を突きつける。友達同士も、互いに「律法」を突きつける。そうすると、「律法」を突きつけてきた相手に「罪責」の「不安」を重ね、「恐怖」を覚えるようになる。それは「怒り」であり、「敵意」である。すなわち、互いに「律法」を突きつけ合うことで「敵意」が生じる。

「敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。」(エペソ 2:15)

人は「敵意」を覚える中、突きつけられた「律法」をクリアーすることで「恐怖」に打ち勝とうとする。あるいは、「律法」を突きつけた相手を逆に威嚇し、自分の方が強いことを示すことで「律法」を差し戻させようとする。そうすることで、「律法」がもたらす「罪責」から解放されようとする。どちらにせよ、「不安」を排除しようとする過程にあるのは、相手に対する「敵意」であり、「怒り」である。

さらに言うと、人は絶えず自分の手にしたものが「無」にならないかと「不安」を覚えている。別の言い方をすれば、自分の評価が下がりたくないかと怯えている。その「不安」は自分よりも勝った評価を持つ者が現れると現実となる可能性があるため、自分よりも勝った者はいないかと、人は絶えず周りの人と自分とを比べる。その中、自分よりも勝った者を見ると、その者に「不安」を重ね「恐怖」を感じる。「嫉妬」という「恐怖」を抱く。それが、人との間に評価を巡る争いを生じさせる。

このように、人は人との交わりに困難を覚え、自分の中の「不安」を相手に重ね、相手を「恐怖」にしてしまう。そうすると、相手に「敵意」を覚え、「怒り」を覚え、「嫉妬」を感じるようになる。これが罪の入り口となって、様々な罪の行為に発展していく。まさしく、人は一生涯「恐怖」の奴隷になってしまった。その様子を聖書は、「一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々」(ヘブル2:15)と評している。では、この戦いの先には一体何が待っているのだろうか。

● 戦いの先にあるもの

こうした「不安」を「恐怖」に変えて戦う企ては必ず失敗する。なぜなら、「不安」はまだ起きていない将来のことであって、しかも、その将来のことは変えられないからだ。一体誰が、「肉体の死」、さらには神との「疎外」を排除できると言うのだろうか。そのようなことは誰にもできない。将来の「不安」を排除することなど不可能である。そのため、いくら「恐怖」に勝利を収めようとも、「不安」を排除する試みは必ず失敗する。勝利しても一時的満足が得られるだけで、再び「不安」が表に現れ、再び「恐怖」との戦いが始まってしまう。

このように、いくら「恐怖」と戦っても「不安」は消えないので、「恐怖」との戦いは終わらない。そうすると、やがて「恐怖」に勝てない事態も起きようになり、人は「絶望」と対面することになる。「絶望」は、自分が生産した「恐怖」から逃げ出すよう指示してくる。人との交わりから逃げ出すよう、一切を捨てて逃げ出すよう指示してくる。その手段として、孤独を選択する者もいれば、快楽を選択する者、中には死を選択する者もいる。

いずれにせよ、「絶望」という状態に入ると、心の病と言われる症状を発症する。それは、対象のない「不安」が心を押しつぶしてしまうのではなく、あくまでも、自分の心が生産した「恐怖」に心が押しつぶされてそうになってしまう。

そうであっても、この状態になったなら専門的な治療が必要となる。精神科や心療内科の助けが必要になる。専門のカウンセリングが必要になる。ただし、そうした治療では「不安」を取り除くことはできない。できないが、「不安」を正しい位置に戻すことはできる。正しい位置とは、「不安」を「恐怖」に変えるのをやめさせることを指す。「不安」を感じる自分を受容

させることで、「恐怖」との戦いを休戦させるのである。そうすれば、心の病と言われる症状は改善されていく。だが、人にできるのはここまでとなる。

見てきたように、人は神との結びつきを失って以来、「有限」となった自分の姿に、神と「疎外」された自分の姿に、言いようもない「不安」を覚えるようになった。人はその「不安」を何とかしようと、見えるものに「不安」を重ね、それを「恐怖」として戦ってきた。しかし、この戦いの先には、人の心を病ませてしまう「絶望」が待っている。ならば、「不安」に対し、私たちはどうすればよいのだろうか。今度は、「不安」に対する正しい処置を見てみよう。

- 「不安」は敵ではない

「不安」に対する正しい処置の第一歩は、「不安」は戦うべき敵ではないことを知ることである。「不安」は、神なしでは生きられない人の「弱さ」の叫びであり、神に結びつくために必要な「接着剤」である。人が「不安」を覚えるようになったのは、神との結びつきを失ったからであり、見えるものに「恐怖」を覚えるからではない。あくまでも人の覚える「不安」は、神のもとに帰りたいという、神の「いのち」で造られた「魂」の叫びである。

「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます。」
(詩篇 42:1)

私たちは、「魂」が叫ぶ「不安」があるからこそ、神を求めることができる。「不安」を覚えるからこそ神に祈ることができ、「不安」があるおかげで神と結びつくことができる。「不安」がなければ、一体誰が神を呼び求めるだろうか。つまり、人の「弱さ」から生じた「不安」は排除すべきものではなく、神の恵みにあずかせてくれる「宝」なのである。

「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」(Ⅱコリント 12:9)

しかし、人は「宝」である「不安」を、自分が交わる相手に重ねて排除しようとする。そのせいで相手に「恐怖」を覚えるようになり、相手が意に反することをすれば赦せないとなる。「不安」は「恐怖」の餌食となり、赦せないという思いに食べられてしまう。だから聖書は、次のように教えている。

「もしあなたがたが人を赦すなら、私もその人を赦します。私が何かを赦したのなら、私の赦したことは、あなたがたのために、キリストの御前で赦したのです。これは、私たちがサタンに欺かれないためです。私たちはサタンの策略を知らないわけではありません。」(Ⅱコリント 2:10-11)

赦せないという思いが来たとき、それはもう、「恐怖」を抱かせる「サタンの策略」に落ちてしまっている。「サタンの策略」とは、まさしく「不安」を人に重ねさせ、人に「恐怖」を覚えさせ、赦せないという思いを抱かせることにある。人を愛せなくさせ、神から引き離すことにある。ゆえに、「不安」に対する正しい処置の第一歩は、「不安」は戦うべき敵ではないことを知り、人に「不安」を重ねるのをやめることである。それは人を裁くのはやめ、赦すことを意味する。そして、神の治療を受ける段階に入る。その治療はこうなる。

● 「不安」に対する神の治療

人の覚える最強の「不安」は、罪に対する罰である。人は罪を犯す自分を責め、こんな自分が愛されるはずもないと思い込んでいる。そこで、神は聖書を通して、罪を言い表すよう指示する。先に、人を裁くのはやめて、赦すことが必要だと述べたが、人を裁いてしまった罪を言い表せばよい。人を赦せないとした罪を、すなわち人を愛せない罪を言い表せばよい。そうすれば、罪が赦されることを知るからと、神は聖書を通して教えておられる。

「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」（Iヨハネ 1:9）

罪が無条件で赦されたと知れば、こんな自分であっても神に愛されていることが分かる。そうすれば、覚えていた罪に対する罰の「不安」は神に吸収される。罪に対する神の罰は、単なる取り越し苦労であったと知る。

すなわち、「不安」に対する神の治療は、神から肯定されている自分を受容させることに集中する。無条件で愛する神の愛を受容させることで、「不安」を吸収するのである。ゆえに、神の治療に必要なのは、神が無条件で罪を赦すと言われる神の愛を、そのまま受け取る「勇気」である。神に無条件で愛されている自分を受容する「勇気」を必要とする。

私たちはこの治療を何度となく繰り返す。というのも、私たちは日々、自分の中の「不安」を人に重ね、人に「恐怖」を覚え、人を憎んでしまうからだ。人に怒りを覚え、裁いてしまう。あるいは良く思われようと、神よりも人の言葉に従ってしまう。そうした罪に気づく度に、自分の罪を言い表し、人に重ねた「不安」を神のもとに持っていくのである。

そして、無条件で罪が赦される神の愛を受容し、ありのままに愛されている自分を受け入れていく。そうすることで、「不安」は神の愛に吸収され、人は神との結びつきを強くしていく。それに伴い「不安」が「平安」へと姿を変え、少しずつ人を愛せるようになっていく。これが神の治療であり、この治療は、人の心が「恐怖」を生産し続ける限り続けられる。

また、人が認識する「不安」には「肉体の死」と「無」もあるので、そちらも治療してください。こちらの治療は、神の約束を以て行われる。神は、人の体を「朽ちない体」に取り替えることを約束し、地上で築く神への愛は神の国での宝になることも約束される。それにより、「肉体の死」も、地上での生活が「無」になることも、全く恐れることはないと言われる。ゆえに、この治療に必要なものは、神の約束を信じる「信仰」となる。しかし、先ほどの罪を赦す神の愛を受け取るなら、受け取った神の愛が神の約束を信じさせてくれるので、心配する必要はない。

このように、「不安」の解決は神しかできない。そのことはイエスの姿を見ればよく分かる。イエスは人と同じ「弱さ」を以て来られたので、人と同じように「不安」を覚えられた。ゆえに、イエスは十字架に架かる前、父なる神に切に祈られた。そのことで、「不安」が向かうべき正しい場所は「人」ではなく、「神」であることを教えられた。



人が覚える「不安」は、私たちを神に結びつける「接着剤」にほかならない。

- 「接着剤」

何かと何かを結び合わせるには、必ず結び合わせるための「接着剤」が必要になる。木と金属を結ぶ場合、布と紙を結ぶ場合、あるいは、石と石を結ぶ場合、必ず何らかの「接着剤」が必要になる。神と人を結ぶ場合も同様である。そこには「接着剤」が必要となる。それは、神に対する「知識」でもなければ、神に対する「行い」でもない。それは神なしでは生きられないという「弱さ」であり、その「弱さ」を認識する「不安」である。

イエスの時代、律法学者たちは「知識」で神と結びつこうとしたが、彼らは律法の「知識」ゆえにイエスにつまずき、イエスを迫害した。「知識」で以て神と結びつこうとすれば、神は人の知恵の下に置かれてしまうので、人よりも遙か上に存在する神に必ずつまずいてしまうのである。

「事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。」
(I コリント 1:21)

また、自分の「行い」で神につながろうとするとどうなるだろう。実際、それを熱心に試みた人がいた。それは弟子のペテロであった。彼は、誰よりも熱心に、イエスの言われることを行なった。熱心に伝道し、熱心に奉仕をした。それゆえ、ペテロは自らの「行い」に対する自信から、何があってもイエスとの結びつきは壊れないと信じて疑わなかった。しかし、イエ

スが十字架に架かる出来事に直面したとき、ペテロの方からイエスを裏切り、逃げてしまった。このことは、「行い」では神と結びつけないことを示している。律法の「行い」によっては、誰も義と認められないのである。

「なぜなら、律法の行いによって義と認められる者は、ひとりもないからです。」(ガラテヤ 2:16)

ならば、「弱さ」はどうだろう。そこから生じる「不安」はどうだろう。これは、確実に私たちを神に結びつけてくれる。そのことは、赤ちゃんを見ればよく分かる。

赤ちゃんは何の「知識」もなければ、何一つ「良い行い」もできない。しかし、自分の「弱さ」ゆえに「不安」を感じる。だから、母親を絶対的に信頼し、自分の身をゆだねることができ。そして、赤ちゃんの「不安」は母親に身をゆだねることで「平安」となる。同様に、私たちの覚える「不安」も、神への絶対的な信頼に導いてくれるのである。「不安」こそが、私たちを神に結びつける唯一の「接着剤」となり、私たちに「平安」をもたらしてくれる。

これであれば、人の資格に一切依存しないので、誰であれ神に結びつくことができる。誰であれ、その本質には神なしでは生きられないという「弱さ」があり、そのことで必ず「不安」を感じるからだ。ゆえに、人の資格には関係なく、誰であれ神と結びつくことができる。「不安」はそのように使うのであり、人に重ねて「恐怖」とし、人と戦うために使うのではない。

- 「不安」は「愛」である

以前、「愛」についても詳しく説明したが、「愛」とは、「神との結合」であり、神と結びつこうとする運動であった。ということは、「神との結合」を可能とする「不安」は、紛れもなく「愛」そのものである。人の「弱さ」に対する「不安」という認識は、神と結びつこうとする「愛」にはほかならない。



そうであるから、神と結びつこうとする「不安」を神でないものに結びつけようとする「恐怖」になってしまう。「恐怖」は、キリストの「いのち」で造られた「魂」が、自分をキリスト以外に結びつけるなど叫んでいる。ゆえに、「恐怖」を覚えたなら、キリストに目を向けるのである。人を憎んだり、人に怒りを覚えたりしたなら、それは自分の「不安」を人に重ねていることに気づき、本当は憎んでも、怒ってもいないことを知ることだ。人は神に似せて造られているので、その本心は、神と人とを愛したいと願っている。

そうした本心があるからこそ、人は川で溺れている人を見れば、自らを省みることもなく助けたいくなる。電車のホームから落ちた人を見れば、自らを省みることもなく助けたいくなる。子どもが車の車線に飛び出せば、自らを省みることもなく助けたいくなる。火事を見れば、自らを省みることもなく助けたいくなる。こうしたとっさの出来事に現れる人の姿こそ、人の本心が現れている。それは「愛」の何ものでもない。自らを省みることもなく十字架に架かられた、あのイエスの「愛」と同じである。

すなわち、人は人を憎み、嫉妬し、争ってしまうが、それはわけも分からないでやっているというのが事の真相となる。だからイエスは、ご自分を殺そうとした人たちのためにこう祈られた。

「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」
(ルカ 23:34)

人が人を憎むのも、人が人に嫉妬し争うのも、自分の「不安」を人に重ねたことに起因する。相手が憎くて憎んでいるわけでも、争いたくて争っているわけでもない。ただ自分の中の「不安」を相手に重ねるからそうなる。そうであるから、人は人を憎んでしまったあと、争ったあと、なぜそんなことをしたのかと後悔する。イエスの言われたように、人は何をしているのか、自分でわからないでしているのである。

もう一度言うが、「不安」は神と結びつくために必要な「愛」である。しかし、「不安」を人に重ねて排除しようとする、その相手は「恐怖」となり、愛せなくなってしまう。このカラクリを、忘れないでほしい。